

比翼ひよくの束たばね 第六十八回

「市長室あれこれ」

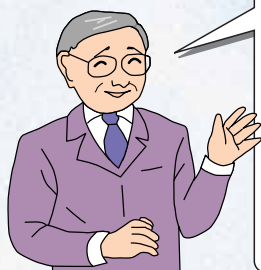
市長室は市役所2階東側にある。これまで、この部屋で何人も市長が執務にあたってきた。

矢板市が市制を施行したのは昭和33年11月1日である。初代市長は大島喜一郎市長であり、以来高柳宰正、山縣有信、大谷英一、山口公久、大氣弘久、山口公久市長と続き、私は8代目となる。

現在の庁舎は、山縣有信市長任期中の昭和38年4月に落成した。建設以来51年の歴史を刻み、市制施行してから56年目を迎えた。

市長には、毎日さまざまな問題・課題がつきつけられる。それら一つひとつに判断が求められ、対応策を講じなければならぬ。

私（市長）の思いや願いなどを市民の皆さんにお伝えします。



軽微なものから重要なものまで適確な判断が求められ、その結果の最終責任は市長にある。

いろいろな思考をめぐらし、どうすべきなのか迷っている時、前の市長さんだったらどう考え、どのように判断し、対応されるのだろうかと思うことがしばしばある。

そういう点では孤独である。だからこそ、常に身も心も健康でなければならぬし、さまざまな知識や豊富な経験が必要となる。

そして何と言っても、人の心の痛みがわかる優しさや正義感、意思の強さが必要ならぬと思うことが多々ある。

市長のところには、メールや市長への手紙などで、さまざまな意見や要望が寄せられる。

時にはお叱りも受ける。もちろん行政として反省しなければならぬことも多々あり、改めるべきことは素直に改め、誠意をもって対応している。

これまでいろいろな人に出会って、さまざまなことを学んできた。その経験をとおして教えられたことは、「人間は耐えることによつて、本当に成長することができる」ということである。

怒りや不満、これをこらえることができずに何度も失敗し、後悔してきた。耐

えること、苦しみをこらえることができなければ、大きな仕事はできない。

また「政治は結果責任である」ことも思い知らされている。

市民の思いや願いはさまざまである。その思いや願いを何とかしてかなえ、実現させてやりたいと思っている。

しかし、要求要望が広範多岐にわたる、きわめて個人的なものも理不尽なものもある。

行政は公平性、公共性の原理を貫かなければならない。

また、さまざまな条件から、あれもこれもというわけにはいかない。したがって、その思いや願いを叶えてやれないことがあまりにも多い。

しかし、いくら心を痛めても、そのことが実現され、形となつて現れなければ評価されない。

つまり、結果責任という厳しい現実がある。

人を育てるといふことも大切な任務である。

まちを動かすのも、市役所を動かすのも人の力だからである。

職員の持てる力を十二分に発揮させ、意欲をもつて職務にあたらせるためには、適材を適所に配置することが人事の鉄則である。

とにかく、謙虚さと仕事に対する前

向きな姿勢があれば、必ず成長できると信じている。

また、組織の中の一員として仕事をするのであるから、お互いの人間関係がきわめて重要となる。職場がいやになるのは、仕事が大変だからではなく、人間関係が原因となつていふことがほとんどだからである。

立場が人をつくるということもある。それぞれが自分の役割、責任を果たさなければならぬ立場になつてみて、自分以外の相手のことを真剣に考え、その人の気持ちを理解しようと努力するようになる。

また、そのことによつて改めて自身自身を見直すと同時に相手の気持ちを推しはかることができるようになる。

したがって、指導的立場に立つものは、常に自分の姿勢を問い続け、部下職員一人ひとりの心の中を理解しようとしなければならぬ。

心の動きを敏感に感じ取り、一人ひとりの存在を認めてやること。

誰でも弱さがある。自尊心があるが故に、自己弁解もし、言い訳をする。だからこそ、その逃げ道を遮断してはならないし、寛容さと心の広さが求められる。

このことは、私自身に言い聞かせていることでもある。

※タイトルの「比翼の束」とは、市民と行政を翼に例え、ふたつを束ねてまい進するさまをイメージしています。